

地方都市における地域福祉と住民活動の実態

－小諸市での調査を踏まえて－

河合 克義（明治学院大学社会学部教授）

1. 研究活動の概要

河合克義担当の「福祉開発フィールドワーク」（明治学院大学社会学部社会福祉学科 2 年の授業科目）は、今年度、小諸市協働連携事業調査研究活動奨励金をいただき、学生と小諸市を訪問して、市の福祉施策、社会福祉協議会の活動、そして自治会活動の実態を調査しました。事前学習として、大都市と地方都市や農村地域の基本的条件の違い、その中での住民の生活の実態を比較検討しました。

まず、東京都港区という大都市の住民の生活状況、特に高齢者に対する港区の諸施策について、港区役所に訪問して、聞き取り調査をしました。次に、港区社会福祉協議会を訪問し、港区の地域福祉活動の実態を学びました。さらに、小諸市の地域特性と施策、社会福祉協議会の活動実態について学習しました。

以上の事前学習を終えて、8 月末に、長野県小諸市を訪問し、市役所、社会福祉協議会そして行政区の一つ東小諸区で聞き取り調査を行いました。

調査期間は、2015 年 8 月 25 日（火）～27 日（木）です。調査の日程は次の通りです。

8 月 25 日（火）	11 時ごろ軽井沢到着、小諸へ、昼食後、「懐古園」を見学
	15 時 30 分～17 時 30 分 小諸市役所で市の地域特性と全体政策、 高齢者介護・福祉について聞き取り
8 月 26 日（水）	10 時から 12 時 小諸市社会福祉協議会への訪問調査
	14 時から 16 時 依田発夫氏および高橋要三氏より東小諸区の 支え合いネットワーク活動、小諸市自治基本条 例についての聞き取り
	18 時から 社協職員等との懇親会
8 月 27 日（木）	午前 調査のまとめ

市職員、社協職員、そして東小諸区の役員との懇親の場もあり、学びの多い、そして楽しいフィールドワークとなりました。最後の日は、軽井沢での散策の時間もあり、良い思い出となったと思います。

フィールドワーク参加学生（明治学院大学社会学部社会福祉学科 2 年生）は、次の 11 名です。

尊田 史織、縄田 夏鈴、夏 小翔、橋本 実佳、原田 清人、大場 知子、佐々木 葵、栢野 桜、成澤 史乃、西川 詩乃美、野本 美貴

私たちは、調査の結果について 2015 年 11 月 14 日に開催された明治学院大学社会学部学内学会において報告しました。

2. 研究活動の結果

調査日程からも明らかですが、今回の調査では、小諸市の地域特性を踏まえて、特に高齢者に対する福祉施策の現状を把握すること、また社会福祉協議会としての高齢者への活動の現状と課題、さらには東小諸区の見守り活動の実際を、聞き取り調査を通して把握しようとしてしました。

小諸市の人口は約 4 万 4000 人であり、市民の実態を把握しやすい規模の自治体です。高齢者福祉施策も介護保険制度を中心に、積極的な施策を推進しています。いま焦点となっている地域包括ケアシステムの推進を軸に、医療と福祉の連携が検討されています。

私たちの調査で、特に印象に残ったのは東小諸区の活動とりわけ地域の見守り活動です。この地区の高齢化率は 19%台で、市内の行政区の中では最も高齢化率が低いグループに入ります。そういう地域にも拘わらず、今後の高齢化を見越して、今のうちから高齢者を中心とした見守り活動を展開していることでした。予防的な活動として学ぶ点が多いと思います。

また、この東小諸地区の会館で、「小諸市自治基本条例」について高橋要三氏より経過と現状について伺いました。市民がまちづくりを自分たちで考え、選択し、決定するためのルールを整備する目的で作られたとのこと。小諸市は、条例について住民の理解を深めようと 2007 年度より、市民学習会や市民会議、市民フォーラムなどを行っています。この条例では 16 歳から民投票権があり、市民からも「若い人も権利と義務を意識できて良い」という意見があるとのこと。課題としては、この条例が市民にあまり認知されていない点があるとのこと。説明して下さった元市議会議員である高橋要三氏も、市民の認知度が薄いため今のところあまり効力を持っていない、また、条例の中の文言についての議論が不十分であることは課題とのこと。私たちの感想としては、素晴らしい条例であり、内容をもう一度、自分達のものとするような取り組みが必要なのではないかと思いました。

さて、2010 年の国勢調査によれば、小諸市の人口は 43,997 人、高齢化率は 26.2%でした。高齢者人口は、約 1 万 1200 人となります。現在、実質の一人暮らし高齢者は、約 1000 人とのことでした。

見守り活動、地域包括ケアシステムの対象として高齢者の内でも、孤立問題がより深刻に現れやすい一人暮らし高齢者の生活実態が、必ずしも全体的に明らかにされているとは言えないのではないかと思います。

友愛訪問として、月に 2 回、ヤクルトを一人暮らし高齢者に配達しています。その配

達対象数は平成25年で699人とのことでした。友愛訪問は、安否確認には有効な方策の一つですが、課題を抱える世帯の生活全体を把握するには限界があるのではないでしょうか。

私たちは、小諸市の一人暮らし高齢者の生活実態調査の必要性を、今年度の調査研究活動から痛感しました。行政として実態調査を実施することを提案したと思います。それは小諸市での住民福祉活動の方向性を考える素材にもなると考えます。

3. 参加した学生の感想

最後に、今回の調査に参加した学生の意見の一部を掲載します。

○小諸市を訪問し、感じた地域福祉

河合克義先生の下で1年間、福祉開発フィールドワークの授業で地域福祉について学んできました。

河合先生の授業では毎年さまざまな地域を訪れ、都市との比較をしたり、その地域の現状を調査しそこから何が見えてくるのかを考えたりしながら学んでいきます。

今年度は2泊3日で長野県小諸市へ聞き取り調査をしました。

小諸市を訪れる前の授業内では、まず自分たちの学校のある港区や小諸市の地域特性について調べながら地域について基本知識を身につけました。そして夏に訪れる小諸市での現地調査に向けての練習も含め、実際に港区役所や港区社会福祉協議会へ訪問し、役員の方たちのお話を伺いました。このような機会は私にとって初めてであり、どこに注意して聞けばよいのか、要点はどこなのか、かなり困難でした。

小諸市では小諸市役所、小諸市社会福祉協議会、東小諸区の自治会でお話を伺いました。今まで春学期に机上で勉強してきた地域の現状を自分に目で確かめられました。個人的に調査できてとてもよかったと感じたものは東小諸地区の調査です。長野県の「小諸市」としては調査を進めてきたものの、そこから先のミクロなところまでは考えていませんでした。市役所などは行政であるが、そこに住んでいる住民の気持ちまでは伝わりづらいものがあります。東小諸区では住民主体の地域づくりが行われ、自分たちの住んでいる地域をよりよいものにしよう、という想いが伝わりました。その想いが地域全体へと広がり、1部ではなくさまざまな世代で作り上げられたら、ニーズの幅も広がり多くの方が住みやすい地域になるのではないだろうか、とさまざまな案が自分の中でも出てきて、地域福祉の面白みを感じました。

実際に小諸市を訪問してみると、思っていた地域とは違いました。小諸市は思っていたより何倍も人間味に溢れ、自然豊かで、あたたかい町です。今まで思っていたところと違う、ということはきっと小諸市だけではなくどこの地域にも当てはまるのではないのでしょうか。どこの地域も調べたものと、実際に言って自分の目で見るとは違った印象を受けると思います。

実際にその現場へ行き、現地の方々とお話をして、交流をすることが大事であると感じました。実際にいくことでしかわからないことが本当に多いです。調査終了後の懇親会では、普段中々話す機会のない大人の方たちと交流し、貴重なお話をお聞きする機会もあり、充実した内容でした。

このフィールドワークを通じ、地域福祉というものを、肌身をもって感じ取れたと思っています。地域福祉とは、地域のためではなく、その地域に住んでいる住民のためです。住民の想いをのせた地域づくりをした結果、その地域の魅力が引き出せるのだと思います。河合先生、一緒に1年間やってきた仲間、小諸市の方々、本当にありがとうございました。

○「現場に行っていないければ発言権がない」

河合先生のゼミで高齢者福祉や地域福祉、地域福祉現状、社会福祉協議会などに関することを学んできました。とても充実な一年間だったと思います。

我々は3月9日総務省主催の「都市コミュニティの最前線」（河合先生が基調報告）というシンポジウムに参加し、3月15日の「港区の地域福祉のこれから」、6月19日港区社会福祉協議会訪問、夏休み中、8月25～27の2泊3日長野県の小諸市合宿、市役所や社会福祉協議会、町内会などを実際に行き、聞き取り調査を行いました。皆で楽しい懇親の場もありました。学問、知識、現場、人生、結婚論、色々な話をしてきました、とても満足し、楽しい経験でした。11月14日社会学部研究発表会にも発表し、ますます知識や発表方法、能力を身につけました。

信濃毎日新聞（2015年8月27日付）に私たちの調査について紹介されました。



東小諸区での聞き取りの様子

（甘いトウモロコシと美味しい桃をご馳走になりました）



東小諸区での聞き取りを終えての記念撮影

今年、長野県小諸市訪問のため、春学期から、先生の下で皆積極的に社会福祉協議会について理解し、また港区社会福祉協議会訪問する事ができました。その前にもフィールドワークで3グループを分かれ事前学習をし、それぞれを発表してから、港区社会福祉協議会に行きました。普段と違う雰囲気緊張感をしながら、話を聞き、多くの学びの機会となりました。都市部の社会福祉協議会の仕事が大体把握出来ました。そして地方はどうかという問題関心を持ちながら、長野県小諸市への合宿を楽しみしていました。

毛沢東はこういう言葉を残しました。「現場に行っていないければ発言権がない」。今回実際に現場に行って、現地の人の話を聞いて、その場所の生活スタイルに合った政策ややり方が沢山見えてきました。支えあいネットワーク、一人暮らし支え地図、買い物困難な高齢者に定期的販売会を開催、認知症反射ステッカーなど、都市部ではなかなかできない方法や制度を作っています。このフィールドワークを通じてとても勉強になりました。

最後の最後は河合先生とゼミの皆さんに感謝します。とても有意義な一年間になりました。ありがとうございます。



小諸市社会福祉協議会前にて

○河合フィールドワークを終えて

私たち河合フィールドワークでは、長野県小諸市での高齢者の実態調査を行いました。小諸市は人口約4万5千人で、1町5村の合併でできました。1日目は小諸市役所に行きひとり暮らし高齢者の生活状況を聞いて、市が行っているサービスやボランティアについてお聞きしました。小諸市は自治基本条例を定めており、市民がまちづくりを自分たちで考え、選択し、決定するためのルールを整備する目的で作られました。小諸市はこの条例について住民の理解を深めようと市民会議、市民学習会、市民フォーラムなど行いしっかりと住民が納得いくような活動を実施しています。そして、この条例は平成22年4月1日に施行されました。

また、小諸市は在宅医療・介護連携の推奨や介護予防の推奨、社会参加の支援、支え合い地域づくりの推進などいくつかの施策も行っています。

しかし、問題点もいくつかあり、医療と介護との連携が難しかったり財源不足が発生したりしているということをききました。

2日目には小諸市社会福祉協議会を訪問しました。まず社協の財源は、住民会費と賛助会費、寄付金から社協は運営しています。社協は村ごとに担当が決まっています人間関係も他の社協より深いと思いました。また社協が行っている事業もいくつか説明されました。まず、災害時に避難場所や近隣同士の場所の把握のために災害時等支え合いマッ

ブ作成事業を行っています。この事業には問題点もあります。目立つところに住所がバレてしまうので悪用されてしまう可能性があります。また更新率低いので住民全員が把握しているのかが問題とされています。また、地域住民同士が繋がりを濃くするために福祉学習事業なども行っています。



小諸駅ホームにて

東小諸市の自治体にも訪問してきました。東小諸市は人口 900 人であり、小諸市より高齢者率は低く若い人もたくさんいます。東小諸市の高齢化率は低位であるが、65 歳以上以上の夫婦のみ、または単身世帯は約 29%と他にくらべて平均的であり、また介護保険の利用者は年々増えつつあります。

東小諸市の自治体のみなさんはとても優しく、地元の野菜やお菓子で私たちをおもてなししてくれました。みなさん暖かくまた小諸市に來たいと思えました。二日目の夜は小諸市の社協の人たちと懇親会を行い、地元のみなさんとより仲を深めることができました。

2 日間、小諸市で調査をして、とても良い勉強になりました。小諸市の建物や交通に関しては東京と比べると不便な点もあったが、ところどころ建て替えている場所もあったので若い人達の住民が増えるといいなと感じました。小諸市にはつぎは観光で訪れてまた地域の人々の暖かさを感じてみたいと思います。